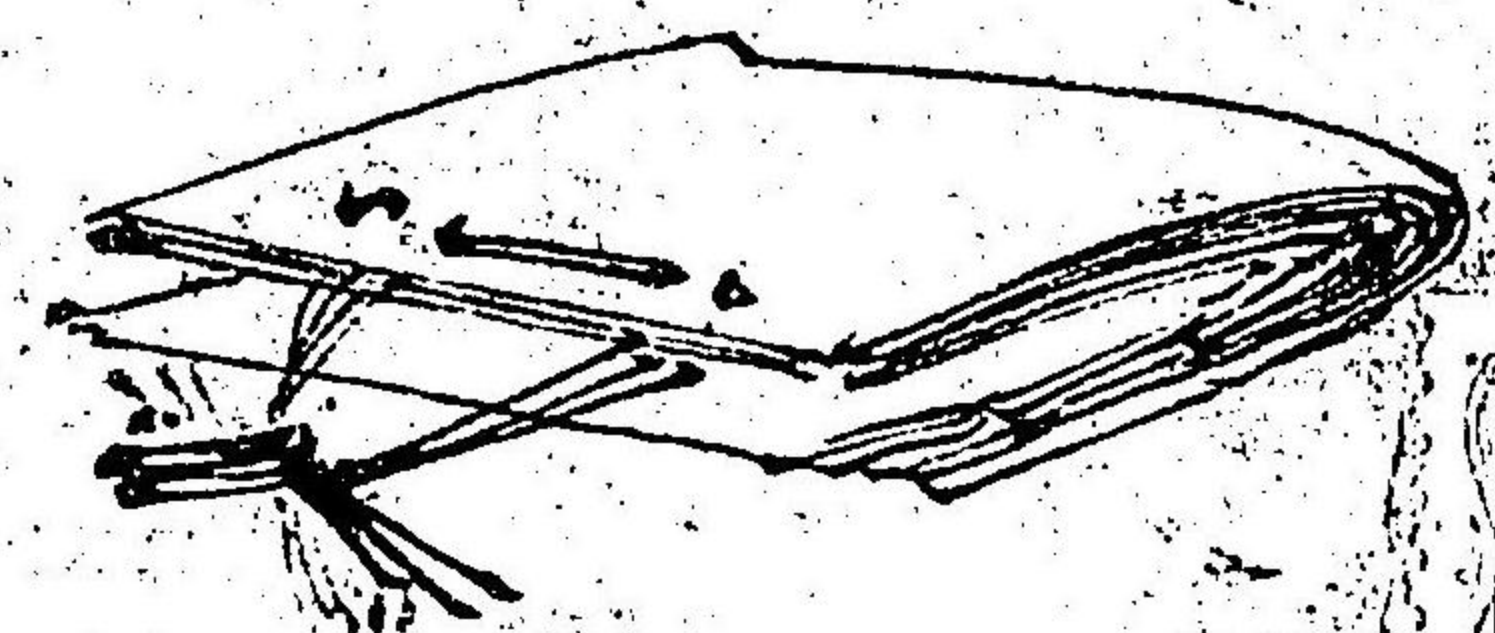
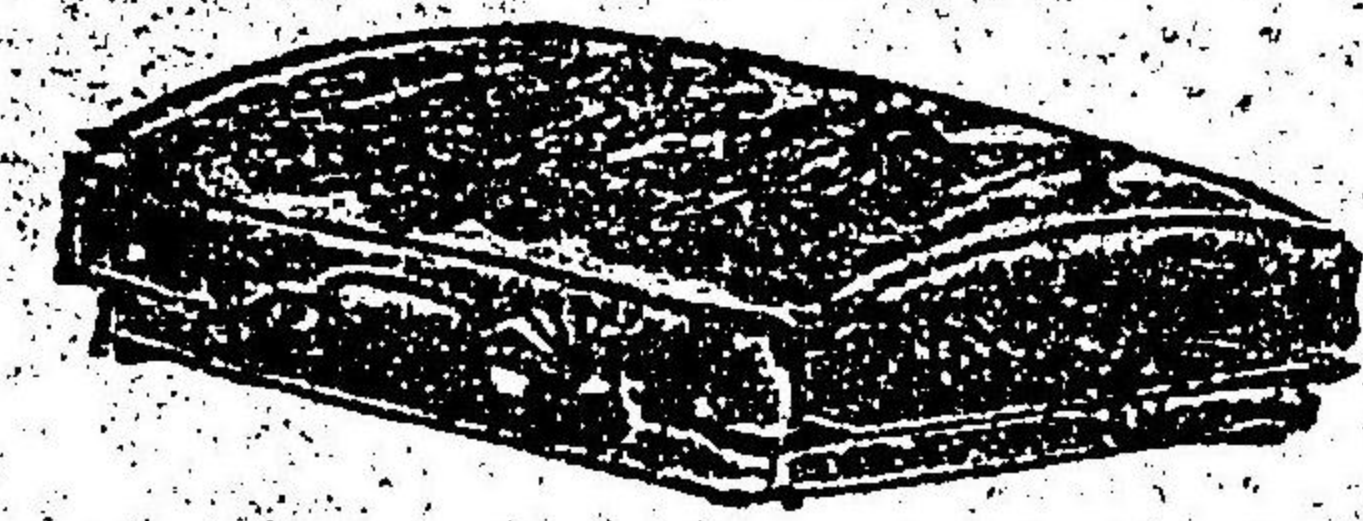


芳井
馬宿選
冠附
虫目鏡



665
78

冠附虫目鏡

芳井馬省選

特22
916

今雜誹と唱へ冠附塲附折句畫合などくさく流

行して世上の好人名句多く日々新にしてかぞふ

にいとまあらず然とも又初心のともがらは此道

に入たりおもふ其附方などをあやぶみつひ

に止なん人も有つし又は只雜誹などは取に足ら

ずとあざけりてこの道に入らぬ人もあるべしし

かしかさ付折句口合等にてても才智なくしては云

出がたし何にまれ筆を取ての樂しみなれば見く

だすはひがことなるべしはた冠附一句案ずると

てもあらゆる世界の事を心におもひて案じされ

は出来ざるものにして此道に遊ぶ人はよく世上

の義理も明らかになり万事物ごと行届くやうに

もなり又見馴聞なれて平生に持扱はぬ文字などを
覺る事あり雜誹といへども皆倭歌の流にして
歌人は居ながら名所をしるといふも其胸を廣く
世界の事を引よせておもふ故に名所もおのづか
ら知れるといふたとへなり

一初心の間は題の意放れずして只同じ所を立廻
り句にならざる事多し今先初心手引の爲にか
と付の案じ方一ツ二ツを左にあらはす

題 釣ッて置キ

右題にどのやうな事を附ケベしとおもふ時句
より先ツ題意をとぐるべし題意をとぐるとい
ふは釣ッて置きといふ事はどのやうな事が有
ふぞと思ひ出すべし鯉ぶしを釣て置キあるひ
は紙袋を釣てをき或は佐野や橋古手やと門に

衣類を釣てをき又は門口看板を釣てをき人に
物を頼まれ返事をせぬ事にも釣て置といふ事
あり又は魚を釣てをきやんまを釣て置きかや
うに釣ッて置きの題意をいろ〜とぐり夫よ
り句作をすべし

題 廣 なつて

右題廣なつく世間が廣なる或は場が廣なる内
が廣なるからだか瘦て身幅が廣なるといろ
いろ題の心をとぐるなり

題 かとなつて

右かとなつてといふ題或は身上のかとなると
いふ事あり又はからだのかとなるといふ事有
り升がかとなるといふ事あり尺がかとなると
いふ事あり魚肉のかとなるといふ事有り人の

腹立る事をかどなるといふ事もあるなりこれらの事をいろいろおもひ出して其内人の心つかぬ處を取て句を作るべし一ト通りの所は大抵こゝろつくゆへ随分かどなつての意味のよくなる放れた事をつけべし此題の句を一ツ二ツしるす

かどなつて

買人の落た木綿店

此句は則尺のかどなつた處をおもひよりし句なり

かどなつて

笛の役する越後獅子

この句はからだのかどなつて獅子舞のどんぼがへりができぬゆへ笛の役するとおもひより

し句なり

かどなつて

鶏の汁を吸ふ呼屋

この句はかしわを客のあてに買ふてをきしが客のこぬゆへ肉がかどなつて内て奢て仕廻ふ事を思ひ寄り也

題 うしろから

此題は先ツ誰にてもとつそくおもひ當るは女形若衆の事を思ひよるものなればそこを放れて後からはどふいふ事がよかろと工夫すべし後から

お茶汲で出す呉服店

是等よく案じたる所也茶を汲で出るは正面から客へ出すが通例なりそれを後から汲で出る

ところを付しは上手の作なり

句作りは趣向より入たる句あり又は心より入たる句あり或は理屈より入たる句など句の躰さまざま有り句のすがたを一ツ二ツするす一ツばい喰ふて

ひだるふ廣田去ぬ毛剃

これらは趣向より入たる句といふべし

風呂敷で

米屋がおしむ能女房

是等は心より入たる句といふへし

察し入り

蜘蛛の巣いとふ錦織り

これ理屈より入たる句といふへし

たしなみをれ

追剝が遣る我が禪

これらよくおもひつきおかしみふかし

右之外句作りろ有へし初心の爲に一二を

しるす猶題に言葉題あるひはおき題見立題な

どさまざま有るものなれば前のことく題意

をさぐり案じ出す時は随分名句も出来るもの

なり余は准じてしるべしまた点付左右合せの

時は別してかな字をいたゞきて付る事なれば

かなづかいも心得へき事なり句がらよくても

かなちがひにて点の下る事あるなり假字づか

ひの事唱歌の道にては甚むつかしく或ひは口

のい中のお奥のび又口のを奥のお口のに

奥のゑなど遣ひやうはあれども雑誹にては

夫をかまはずいぬわかちなくはゑの差別もな

くつける事なれどもたとへば當世といへばかなにて、どうせら、とかくやうにおもへども當世と假名にてかくときは、たうせいなり

當麻 當麻 當世 唐人 審椒 湯治

豆腐 答

右之類たのかなより出る

冬至 東寺 燈心 問 投

右之類どのかなより出る

柑子 上野 香 講 耕 幸

合 買 斯 肴 孝 高

庚申

右之類かのかなより出る

候 江 紅 乞 鴻 口

右之類このかなより出る

這 詣 舞 申
納 誼 舞 申

扇 此字口にては、おふぎといふも、あふ

ぐといふ縁より、あふぎ、とかくなり

近江 此字口には、おふみ、といふも、あはう

みの略なればあふみ、とかくなり

箒 この字も、はくといふ縁よりはうきとか

く也

養子 此字もやしなふといふ縁よりやうしと

書なり

相場 相違 この字口には、そうば、そうらと

いへどもそのかなより出るなり

庄 障 書 狀 上

右之類しのかなより出る

此外かなづかひの論さま〜あれども雜誹家
に通用のあらましをあらたむるのみ

一句作をせんとおもふものは先平生に隨分人の
句を聞または集本等を見て句意を味ふべし板
本を見る事あざける人もあれども集冊を見る
事はめ句する爲にあらす題意をしり句の姿を
覺る爲也その上にて自身の功者と不功者にて
けちめ有れ共多く見置聞をく時は自ら名句も
出来るもの也猶集冊是迄數多有といへども流
行かはるものなれば當時流行の宜敷句を集左
にあらはす

題次例

- (一) いそがしひ (二) 命かろく
- (三) いかな事 (四) いつかな動かぬ
- (五) 一向ない (六) 去て來て
- (七) 入り用で (八) いかにして
- (九) 壹本で (十) 入て過し
- (十一) 色付ケて (十二) 論に及ばせ
- (十三) 罰が當ろぞ (十四) はしかけて
- (十五) ばつたりと (十六) はるかこなたに
- (十七) 二三度は (十八) 遊まいぞ
- (十九) はとばかり (二十) 懇に往て
- (廿一) 寶來かり (廿二) はぞ聞て
- (廿三) ハイ〜いふて (廿四) へばり付キ
- (廿五) 飛んで出て (廿六) どりが來て
- (廿七) どの道に (廿八) どれ見ても
- (廿九) どく心で (三十) どふなど仕ナハレ
- (卅一) 何所ぞでは (卅二) とばしりて
- (卅三) チト照レじや (卅四) 近付イて
- (卅五) ちよんの間じや (卅六) 違ふた物じや

(七七) ちゝぶつり (七八) 流く
 (七九) ぬぎかけて (八〇) ぬり立て
 (八一) ぬつくりと (八二) 留主遣て
 (八三) 恩に着せ (八四) 帶解て
 (八五) 思ふたよりは (八六) おそまきに
 (八七) おちたてゝ (八八) 覺へが有り
 (八九) おもしろも無 (九〇) おもしろをさ
 (九一) わかりかね (九二) わたくしを
 (九三) 借まじよ歎 (九四) 格子か
 (九五) かぢりかさ (九六) かゞみ見て
 (九七) かたげさせ (九八) よくく能歎
 (九九) よう見せて (一〇〇) よはりけり
 (一〇一) よう廻はる (一〇二) 能はまり
 (一〇三) ようにた物 (一〇四) 弱みそめ
 (一〇五) 太義して (一〇六) たいがいな
 (一〇七) 抱合はせ (一〇八) たゝみかけ
 (一〇九) 立物じや (一一〇) 大そうな
 (一一一) 大事の所じや (一一二) たつた一度
 (一一三) 育テ、やり (一一四) そろくは
 (一一五) そこそ所歎 (一一六) 其手は喰ぬ

(七七) 其所は斯 (七八) 夫につさ
 (七九) 其所をおさへ (八〇) 序じやテ、
 (八一) つんで置 (八二) 附過て
 (八三) つくなひじや (八四) 費なれど
 (八五) 附添ふて (八六) 念頃だをし
 (八七) 何か、何迄 (八八) 何じやしぬ
 (八九) 何ぞに成歎 (九〇) 馴て來て
 (九一) 何たり歎たり (九二) 何なさんす
 (九三) 來年は (九四) 樂くと
 (九五) 向ふ目安 (九六) ひかいかり
 (九七) 馬じやテ、 (九八) 受合ふて
 (九九) 受合ました (一〇〇) 上へに上へ
 (一〇一) うるさそふに (一〇二) ウンと云はし
 (一〇三) 上ハぬりして (一〇四) 乗て來て
 (一〇五) 吞上ゲて (一〇六) 吞込んで
 (一〇七) のしが無 (一〇八) 工合過ギ
 (一〇九) くさり細にも (一一〇) くどい
 (一一一) ぐわつたひし (一一二) くせになり
 (一一三) くゞり歩行 (一一四) 暮かゝり
 (一一五) 噓して (一一六) 養ふて

(七五)	約束して	(八十)	ヤレ剛やの
(九十)	やつとまじ	(七三)	山のやうに
(七三)	間違て	(七三)	真中かす
(七三)	馬士が来て	(七三)	マア左やう
(七三)	又かいヤイ	(七三)	結構な事
(七三)	ふせうぐに	(七三)	舟に乗り
(七三)	ふり捨れ	(七三)	ふくまして
(七三)	二夕道に	(七三)	ふり廻し
(七三)	ふりかけて	(七三)	腰さすり
(七三)	こりめせき	(七三)	こしかけて
(七三)	是はしたり	(七三)	爰で遣
(七三)	剛がし	(七三)	是切じや
(七三)	是が否じや	(七三)	爰等でも
(七三)	照らされて	(七三)	手を廣げ
(七三)	傳授もの	(七三)	出たり入たり
(七三)	天狗になり	(七三)	手のひらで
(七三)	てんがうして	(七三)	有ルものを
(七三)	間を見て	(七三)	有ルかいナ
(七三)	哀なもの	(七三)	哀れなり
(七三)	味付て	(七三)	青くど

(七五)	集ッて	(七五)	案じたよりは
(七五)	跡先見て	(七五)	サアたまらぬ
(七五)	さゝやいて	(七五)	幸いじや
(七五)	さすもの歎	(七五)	さどられて
(七五)	さすりく	(七五)	三人で
(七五)	左様かいナ	(七五)	寒む成ッて
(七五)	さくどすぐ	(七五)	貴様も歎イ
(七五)	氣にこたへ	(七五)	疵がつか
(七五)	疵見せて	(七五)	氣を退て
(七五)	聞や何所も	(七五)	さくにつけ
(七五)	聞出して	(七五)	きんくど
(七五)	油断はならぬ	(七五)	行ぬが勝
(七五)	ゆるりつと	(七五)	指ささきで
(七五)	夕べかす	(七五)	眼遣ひで
(七五)	女夫して	(七五)	見事く
(七五)	見うしない	(七五)	尻こそぼふ
(七五)	しづまつて	(七五)	師走のやうに
(七五)	しめて仕舞	(七五)	辛度やノ
(七五)	尻ふつて	(七五)	辛抱せい
(七五)	しほろしい	(七五)	正月

(指九)	エラおどし	(指九)	エラちよはくり	(指九)	エラかいて	(指九)	ゑろかるが	(指九)	ひつこかし	(指九)	ひやくど	(指九)	最少とひくい	(指九)	もち買ふて	(指九)	モウ喰へる	(指九)	モウ能かる	(指九)	せがまれて	(指九)	精進で	(指九)	脊くくべさし	(指九)	姿かへ	(指九)	助人が有り	(指九)	京へ往て
(指七)	ゑろい	(指七)	得手に入り	(指七)	エラ阿ふれ	(指七)	ゑろ落シ	(指七)	ひつそりと	(指七)	モウしめた	(指七)	モノ見事に	(指七)	物のはづみて	(指七)	世話なしとや	(指七)	せつかく來なが	(指七)	關にして	(指七)	少シゆるめ	(指七)	すげなふに	(指七)		(指七)			

新選虫目鏡

一 いそがしひ

○聲は座敷にある仲居
○二の膳汗で喰ふ丁兒
○佛禮据へて貰た妾
○隣町もおどり有る美男
○捕人にも出る旅のチヨボ

二 命から

○唐の馳走に逢ふ船頭
○手習屋かゝ飛ぶ黒ひ蝶
○鼻に眼貫ふぬれ丹前

三 いかな事

○両手替ッて貰ふ嫁
○凝跡婆にこりた口入
○番頭め憎ひ工合質
○投にも無事であるしうさ
○小倉仲士が見せる帯

四 いつかな動かぬ

○子にも藝の無大百姓
○菊石の曠な後の聲
○しびりに甲斐の無口入

五 一向無ひ

○ぶた肥笑ふ薪屋の處
○せんべ喰てるる風のはし
○小戻る縫子笑ふ毛剃
○札出し質に泣テイヤ

六 去で來て

○味増屋が早ふ入る斬語 ○線香を立て貰ふ舞子
○夕べ氣をしる取り語り ○連ぶし下鼻ぬ九軒宿

〔七〕入用で

○妻にさかりふ女子がた ○荒物釣りがゆく宵宮
○鼻だけ汗を巾ぬ干シ ○仕にせ氣の毒がる家主

〔八〕いかにしても

○疊屋連る儒者の甥 ○豚と伽とに見入った醫
○眼鏡のくもり巾目利 ○法事家具借る道者宿

〔九〕壹本で

○早ふ表紙の去ぬ五行 ○川たけ鳴らす新銀主
○風呂ふきに飽く尾張宿 ○仲士がつらい子供數

〔十〕入過

○茶漬のしふい妻の留主 ○菖蒲の死る庄官の床
○親脇落に泣く水屋 ○嫁入らし後泣義理の兄

〔十一〕いろ付て

○安米みせぬ春日野屋 ○菘めの活す夜店鯛
○法會へ仕込む栗餅屋

〔十二〕論に及ばざ

○色客拵る鬘子の肩 ○櫻見て去ぬ見合御
○酪酊の喧嘩退く達士

〔十三〕罰が當ろぞ

○辨慶に買はす御所辻り ○皷の湯もじを切る脊負
○妾の不足を聞く隣り ○小話の婆へ入った鐘り

〔十四〕はくかけて

○出入の止まる御櫛あげ ○棟梁の去る新油石灰
○野がけ供する新田守り ○涕かんだ紙あふる祖父

〔十五〕ばつたりと

○僧ひ按広の笑止な妾 ○揚の揃ふた杓子かけ
○能い唄去んだ揚弓屋 ○葉が秋つげる庵の窓

○鉄炮の鳴る旅芝居

〔十六〕はるめこなたに

○石打の碑取る太夫 ○瀧見る客が敷す鼈
○野屎樂頭がチヤル返事

〔十七〕二三四度え

○合はす手念の入る百度 ○けたいな物とおもふ嫁
○奇麗に拂ふ拂はず屋

〔十八〕遊まいぞ

○つい有る艾さがす祖父 ○拳の相手へ繼がす貝
○按広の小便笑ふ關

〔十九〕ほとばか

○大庄で味う喰ふ茶漬 ○鼠の給仕する丁見
○小餅肥した漁の鍋 ○取り出へ急かぬ惣上手

二十 響に往て

○霜の夜更す箱屋弟子 ○無道具問ふ家見伯父
○二日に菓子を減らす妾 ○序に亥の目居る伯母

三十一 寶來から

○派利口入とする家請 ○咲く福壽草の急る妾
○落た根太泣く寡儒者

三十二 ほぞ聞て

○縫屋へ下舁るぬり子客 ○手代の器量我折る佗
○伯母の借錢笑ふ藝子 ○今一度十露盤持ッ雛屋

三十三 へい〜いぬて

○格氣茶にする更戻り ○客の貰ひも有る廻し
○返事覺へぬ百の溜メ ○羽織着た毛刺とめく友

三十四 へばりつき

○貰ひ壹歩とする両替 ○隠居は起て起きぬ齧

三十五 飛んで出て

○元手失ふ赤かいる屋 ○おどり子汁におどる下女
○かさねおかしい旅芝居 ○白齒が焼かす巨燵の手

三十六 とりが来て

○隣で執りしぼる母 ○子に油断せぬ古金屋
○櫻の散つた法會立 ○娘へ度紋おづる母

三十七 どの道に

○迎ひ別家が借らす駕 ○掛を春へ佗る木戸
○子無伯母咲介抱の甥 ○還る銀子活る北の伯父
○妹の氣をい呵る母 ○延す氣止る鉢坊主

三十八 どれ見ても

○仕廻ふ脊負へ贅な妾 ○噂と替度ふなる斬屋
○女房へ任す小紋帳 ○泊る氣の無更格子
○地染手本の氣に入らぬ妾 ○鉾のゆかしの能太夫

三十九 どく心で

○鍵盗まる義理の父 ○手筒ボヤケぬ料理屋嫁
○幕の心中に出す呼屋 ○親父とんの取り去親父
○三百目儲ける中風爺

四十 どふなと仕な

○退て呉れ状裂仲居 ○船頭へなじる釣くれ客
○且那の去へすぬる妾 ○呼屋も退したい藝子

三十一 何所ぞで

○癩へ緘敷する按廣 ○止めぬ濱好キ病む男
○牛若丁見のぞく床 ○大酒を呵る伯父の醫者

三十三 とばくりで

○妹も今年しや出ぬおどり ○金剛にぬいだ後家の下女
 ○やんま釣り勝吹屋の子 ○細伴喰れた蒲鉾屋

三十三 ナト照じや

○葎醫が隣をしへる鯛 ○園引をまつ婆新造
 ○衣裳穿られた見合姉 ○初日咄しの合はぬ藝子
 ○仕立もの看板出す夫

三十四 近付て

○裾の皺延す在所醫者 ○床主も泣く破損橋
 ○めつたに阿るいうち婆 ○歌讀なふ鳥帽子折
 ○逃く流す馬行筋

三十五 ちよんの間じや

○居續へ退く間夫の耳 ○銘酒の口切る料理人
 ○芝居へ這入る宮講中 ○見合、仲人の來た揚弓や
 ○仲居を招く料理屑

三十六 違ふた物じや

○茶師かゝ戻る小紋帳 ○紫すきる待った甲斐
 ○太夫の義理に惚る伯父 ○本妻照して去ぬ告人
 ○琴の音を聞く根松賣 ○節無のぶ馳走去入口入
 ○棧敷見あげる松の品

三十七 ちよふつり

○呼屋め譽る歸齋の後 ○記念貰ふた石女妾
 ○柳妻見る若旦那 ○僧落照す夜習ひ子
 ○息子供した出入仲士

三十八 流くで

○寐上戸譏る焼繼屋 ○外母へ裸になる毛剃

三十九 ぬぎかけて

○出端の素湯呑能太夫 ○棚元仕舞ふ月囀ひ
 ○樂頭へ羽織迷ふ生醉 ○大御殿見る御殿買

四十 ぬり立て

○嫁の眼に立ッ炭問屋 ○土佛妾揉む夏按摩
 ○若殿天窓退く金剛

四十一 ぬつくりと

○一焼香する辛抱聲 ○妾妾にした脊負
 ○賄ひ婆が出す安歩

四十二 留主遣て

○拂ひ給はぬ神道者 ○來た處へチャル寡日雇
 ○掛取り去す呼屋爺

四十三 恩に着せ

○彈ける淨るりを彈辨慶 ○野がけの翌に出すしたし

○間夫に産だ子見せぬ藝子

〔四十四〕 帯 解

○路次番讓て遣った婆

○鉄漿の味しる白齒藝子

○晝馬やの邪摩をする毛刺

○葛切り居はる女ナ形

○萩見の客をまつ庵主

○野寺へ減らした母の銀子

〔四十五〕 思ふたよりは

○藪醫が悦な染直し

○味噌汁かへる通し駕

○菜籠のはしい質屋の賀

○呑む父笑て去ぬ佗人

〔四十六〕 ねろまきよ

○長家喧嘩へ来た能師

○紋日世話敷ざれば床

○曇り宿立ッ端手叅宮

〔四十七〕 ねちちたテ、

○糸の膝突くチヤリ語り

○關連が笑ふ出茶やの根太

○明町さがす床親仁

○夜遊ひ更かす鱒船頭

○笠へ傅母呼ふ田植唄

○茶碗の辭義する親父馬士

○薪皿へなへる病後關

○娘數泣く嫁入りし後

○かづり形り寄る趣向の禮

〔四十八〕 覺が有り

○外母の酢好み泣く隠居

○庄屋が世話する迷ひ子呼

○掛取り下手な歸叅の後

○冬野苦にせぬ木綿買

〔四十九〕 ねもろも無イ

○天山買にもく辨慶

○仲人のチヤリを聞き代

○迹跡見舞ふ隣りの醫

○世話場見殘す節季遊

〔五十〕 ねもろをき

○野等へ苦の無旅の父

○仕分る弟へ持たす嫁

○着る日へ指を打る縫子

○風の留主さす縁記賣

○升に夜明の遅ひ妾

○出店へぬいた白ねづみ

〔五十一〕 わかりかね

○その藝子の風俗笑ふ粹

○儒者も困った質の札

○まねき出し入のなへる木戸

○御圖へ按摩頼妾

〔五十二〕 わたくしも

○妾に易料借るお針

○按摩が手出す夜の昆布

○米屋で好きを泣く按摩

○お山ゆへと日手間の贅

○亭主が勧める取りの盃

〔五十三〕 借しましよ歟

○順會の顔聞いた妾

○附込み棧敷へチヤル牽頭

○小便舉人へチヤル夜舟

○前垂かづきなぶる床

○田葉粉を誘う乗合舟

○節季にチヤツた日の目や

〔五十四〕 格子から

○足のおそ成菅蒲うり

○名で呼び込んだ猿廻し

○おどろ子へ足、妾の三味 ○派利達士とこる萩や

〔五十五〕 かぢりかき

○七夕助ける舟大工 ○朱の入して有る二三枚
○巨燧のぬくい炭仲士 ○法師へ壹封損な薪屋

〔五十六〕 かゞみ見て

○手水の間どる若旦那 ○宿引女が消した八方の灯
○小便に立上、機敷 ○今少と遊ぶ雛の客
○晝寐を去ぬる床の客

〔五十七〕 かたげさせ

○足樂します子好鬨 ○奴を連た非番武士
○借屋見歩、行友毛刺 ○棟梁にひれの見ゆる幣
○隠居が買にく、歳暮

〔五十八〕 よくく、能イ歎

○小判だまつて取る兩替 ○笑顔で這入る綿賦り
○櫛へいふだけ借質屋 ○困ふた妾で止む諸藝
○今に質屋に居なり下女 ○呉た儒者笑ふ古掛乞
○内で節季をする牽頭

〔五十九〕 ようみせて

○聳へ古筆を巻く茶器や ○外科の方上氣さす古船
○ぞめく口縫ふ灸居へ下女 ○子と名所立ッ繪師の旅

〔六十〕 よはりけり

○ちんばが提げた見舞鯉 ○縫物や去ぬ愛盛り
○金魚鉢退く傅母丁兒

〔六十一〕 よう廻る

○子へ油断せぬ出合、外母 ○三味稽古ぞめく友仲士
○手代の器量譽る茶屋 ○輪替がぞめく一文風
○御得意丁兒笑ふ鮮屋

〔六十二〕 能うはまり

○繪馬堂いそく去、辨慶 ○心中藝蘇生さす作者
○ふか七ニワカ鳴らす馬士 ○初胡瓜買ふ鳶仲士
○張り合ふ不坐が勝ッ、狂言

〔六十三〕 よう似た物

○五分高、鯛へ番頭の眼 ○三ッ井の紅も見たお家
○間夫の氣をこり合ふ仲居 ○朝寐、寡と笑ふ妾

〔六十四〕 弱みうめ

○關が封切る龍虎圓 ○夢やふられたとんば駕
○右卷尾むく蹴る丁兒 ○辨慶が活かす茶器屋の碁

〔六十五〕 太義して

○家日雇が提た淀屋橋 ○白髪口入の洩れぬ聲
○眼の草臥れぬ板木彫 ○出止ます嫁を入る父

○禮させる持ッ古金屋 ○西陣戻る囲ひぬい
○京仕入レ雛譽る女夫 ○入レ齒屋若戻る父

六十六 たいがいあら

○畫馬屋を覗く親仁分 ○雪の日呵る妾の母
○跡風呂番が急ぐやつし ○皆買テの直をしはるさる
○誘ひ人が笑ふ鏡の妾 ○口明客を呼ぶ干屋
○母へ引度ひ吹子手間

六十七 抱合せ

○枯木活かす池の坊 ○代呂物を干坂の下
○家質直ならず傑口入 ○いろはを書てゐる下駄や

六十八 たゝみかけ

○素麵ゆでる土用干 ○按摩へ咄し乞質屋
○匂ふ下着に出る格氣 ○上ミ下餅につく妾
○別家か思案かる若世 ○お客をしばるさのや橋
○醉丹坊立す花の甍

六十九 立物じや

○何にも間には合はぬ伯父 ○株に直のある肥後仲士
○和子の脊撫る妾の伯母 ○くくさく酔はす印持
○姉の快氣を祝ふ度紋

七十 大ういな

○遅参佗チヤル菊石藝子 ○一度の砂魚に行女夫
○長家だけゆく妾の禮 ○落こんくわいへ居る灸

七十一 大事の所じや

○かけ打子話をみる箱屋 ○消せぬ名に問ふ後家の胸
○刺る髭呵るとり留醫 ○父が利薄う書す附ッ

七十二 たつた一度

○意見に太夫買ふた伯父 ○粹が淀んだ炭屋町
○妾が着て見た染違ひ

七十三 育てやり

○魁が脇取る年忌所作 ○更々の不自由する太夫
○弾く手のぬるい玉藝子 ○まだな舞子へ轉る撥
○遠無い耳の遠ひ姑

七十四 そもくは

○濱講戻りを泣く古濕 ○テヨツと綻びが縫ふた縁
○逼塞の妻憎ひ一ッ家 ○内證手拭持ッ丁見
○謠屋憎ふおもふ父

七十五 そこ所歎

○盤踏行キが逢た花車 ○宿引女振切るはぐれ連
○膝へ来る三毛抛る二日

七十六 其手はくはぬ

○咄しにたく聞按摩
○鴨憶にして戻す暮
○物申へ返事せぬ家
○毛剃が撰って遣る毛貫
○正眞去したる在質屋
○本間にさゝす伽將基
○はかされ土俵とまる關

其所は斯

○毛剃の眼取る櫛の棟
○車座の膝出ばる膝
○指見せてゐる札賦
○母へ小聲になる佗人
○頭取りが借る關の耳
○仲居と酔ふてゐる別家
○太夫の顔もしる繼母
○在所の伯父も来る思明

夫につき

○貫ひ人にある關の揉
○初心をこへる丁兒本
○まくつた床を張りす家主
○小紋帳使ひに行小女郎
○客引きに立ッ杓子掛

其所をれさへ

○見舞人逗留さす幕湯
○不中も洗ふ井戸の神酒
○江戸も見て来た堅法華
○意見の父が呼ぶ弟

序じやテ

○おしたし當る舟留主番
○師走の派手な口入の庭
○さん用をする南禪寺
○見ぬ本也する辻易者

○足らぬ節季をする問屋

附過ギて

○大庄が佗る加減喰
○耳へ色の状裂く美男
○賣りせに戻る茶道具屋

つくのいじや

○法會料理やが逢ふ追剣
○勤化後家ばて泣く和尚
○夜鷹が手傳ふ入鼻代
○彼岸の茶の子張る藪醫

費なれど

○五十荷へ足す機道具
○提灯笑はす兀口入
○番頭の瞞もする藝子
○初めの奢る持った婆
○櫛を上手に直切る矢瀬
○髪結布施る法師の妻

附添ふて

○子のやうな囁と行風呂屋
○舞子の親の顔に藝
○飛上り節季を廻る父

念頃倒し

○合羽干場へ来た夕立
○追ひ焚をくふ手傳人
○棚釣り助が割た鉢
○後家を當家の追善會

何から何迄

○宿替のやうな妾の旅荷
○出ぐすみ婆が役割る用

○前垂も持ッ媒人伯母 ○法事道具に父おもふ
○仲居の世話な白齒藝子 ○父のおかしい旅日記

八十八 何じやしらぬ
○見て来た芝居咄す關 ○辨慶がひらく朝手紙
○土産をはやく母の愛 ○新藝の看板みる箱屋

八十九 何ぞに成歎
○迷ひ子送ッて来て毛剃 ○根附師へ見せる扶桑木
○作者へみせるませ隠居 ○面目ない子チヤル隠居
○妻へ惣領笑ふ父

九十 馴て来て
○嫁もあさつていふ紺屋 ○質屋丁見がせぬやけど
○廓の姉の状讀ぬ母

九十一 何たら歎たら
○馬士が間取りす戒名書 ○連欠びさす鏡の妾
○三日も過た夫の灸 ○小指を無事で置く藝子

九十二 何なさんす
○まめな手捻る矢瀬の馬士 ○飽無心へ立ッ家守
○まゝ事覗く見舞た伯父 ○障った穂先チヤル釣人

九十四 来年
○見人樂します辻易者 ○桃へ指二本折った妾

樂

九十四 おもしろふ無う見る芝居 ○おどり話メ座を持ッ牽頭

九十五 向ふ目安
○粹へ時代もかくお山 ○鏝の云ひ直の違ふ干

○書に喝交せる辻易者 ○位の知れぬ茶器やの基
○新賃の膳は婆か居へ ○附の書キやうの違ふ出茶や

九十六 むかいから

○利キ目の見へた湯治の妾 ○頭痛の直る牽頭持
○見廻て這入る儒者の伯母 ○七日め勵ム取り出同士

九十七 馬じやテ

○大木戸這入る斬難炊 ○夜店筋チヤル鈴按摩
○出米仲士が見入る關 ○下戸關の鳴る後の月

九十八 受合ふて

○父うなつかす詫同行 ○古ル白ぎせる賣る干屋
○少いと間退かす伯父の粹 ○見直しに來た植木賣

九十九 請合ました

○此頃名前誘ふ汁 ○妾宅を去ぬ京染屋
○坊んの詫人が消す線香 ○去ぬる妾の春叩く花車
○花車がつくろふ藝子の鬘 ○耳かり留主居退く仲居

百 上へに上へ

○師を負ふて去ぬ柔弟子 ○御忌かゝ鼻のひく成ル妾

百一 うるさそうに

○茶碗むし喰ふ外母の父 ○朝の棧敷へゆく仲居
○母の根に見る利藝子

百二 うんと云はし

○此世へ戻す柔の師 ○後家公へ状を出ス金剛
○京で書出し笑ふ毛剃

百三 上、ぬりして

○こりさす父が泣く江戸風俗 ○ふ寄り花角力泣く細字
○子の銘人泣く鍛冶や後家 ○置屋店出す高歩借り

百四 乗って来て

○足の辛度イ門ド曲馬 ○妾が早ヨ去ぬ源左衛門
○床で酒買ふ關の伯父

百五 吞上げて

○菓子屋拂ひの多イ茶器や ○手の定ツた目貫彫
○祭り出かはす切レ宿老

百六 呑込んで

○一ト鞍ふやす親仁馬士 ○蕨子へ掛るある呼屋
○白眼幕に去ぬ辨慶 ○吹智へ所作の鳴身弟子
○妹仲居が替はる酌 ○合イ三味が活す官のふ間

○軒かして遣る厄の友

百七 のじが無ひ

○朝茶漬くふ質屋外母 ○二度の鋏持ッ若旦那
○徳な米泣く土仲士 ○呼屋が譽る大蠟燭
○はつかけへ泣く髭足醫 ○借りさせる笑ふ庭作り

百八 工合過ギ

○呼ばれ戻りが喰ふ茶漬 ○雪隠でばつち泣く日雇
○惚人の剛ウなる夜舟

百九 くさり繩にも

○龜井出る馬士感じる僧 ○裸に景の無ひ火方
○居候の精神を笑ふ妻 ○兄の勝負嫌ひ譽る妾

百十 くどい

○目貫の日延聞く奴 ○送り狀の名へこまる馬士
○口入のこまる婆銀主 ○日柄の念を笑ふ酪酩

百十一 ぐわつたひし

○能ゆき弁當出す久三 ○内でたらいを洗ふ丁兒
○門入れる老女房 ○同船泣かす竿數坊ン

百十二 くせになり

○涙茶の間取る油賣 ○他所行キ淋しい懷醫

○素麵も嚙ム政太夫 ○家主をこなす役者裏

百十三 くぐり歩行

○年禮藝子がいとふ天意 ○俱轉に成ル不景氣職
○關との曠に鳴る小兵 ○品玉でぬくどんば髪

百十四 暮かゝり

○片頬の寒い師走機 ○按摩へ切レる絹羽織
○客の出て来る萩る茶や

百十五 噫して

○伯父へ晝寐を起る後家 ○名灸の咄し聞く夫
○失ふて仕廻たいわらの歩兵

百十六 養ふて

○芝居へ仲居買ふ仲居 ○眼鏡の早い大番頭
○翌日の雑用も摘だ妻 ○藁部家穢す預ケられ

百十七 約束して

○八文奢る病後馬子 ○嫁沙汰何の歎の息子
○横町を去ぬ帽子藝子 ○安部野海道を去ぬ質や

百十八 ヤレ剛やの

○内の茶漬を喰ふ質屋 ○癩の納まる有った後家
○質屋が借った鼈甲の眼 ○旅宿を戻る店手代

百十九 やつとまし

○反った子外母へ戻す關 ○立客をみる米謠ひ
○噂が書くのし笑ふ馬士 ○五文屋仕にぞた呼屋果

百二十 山のやうに

○内の菜笑ふ質や呼れ ○這出素顔で連る妾
○關へ素麵盛った母 ○一日の三寶笑風呂屋

百二十一 間違で

○利醫沙汰する焼餅醫 ○蓬菜飾る紀州問屋
○店の藪入り笑ふ木戸

百二十二 真中から

○夜習ひ丁稚泣す猫 ○好の上への染った茶師
○後家親と笑ふ蟹仲人 ○晦日茶漬喰ふ呼屋

百二十三 馬士が来て

○鯖の鮮喰ふ若旦那 ○舞子が提た野田土産
○年數の見ゆる樂太鼓 ○浴中をみる長樂寺

百二十四 マア左やう

○元直を切った孝行日 ○宿引女がやぶる妾の夢
○曠の櫛買ふ京の町

百二十五 マア左やう

○持った手放す辻易者 ○弟子へ眼を借す生花の師
○手放舞清書上る替女 ○呼ぶ顔書いて貰た妻

○さゝれ更先なる夫

百二十五 またかいやい

○小便犬待ッ使丁兒 ○鬚めを直す猿廻し

○あづく子數妾聞旦那 ○繼目嬉しい馬士の汁

百二十六 結講な事

○親父荷持へ狭む蛸 ○庄官が數買ふいろは歌

○將基上手がりへ苦な父

百二十七 ふせうとくに

○飛脚へ掛る小便綿 ○奴がになふ八升樽

○妻が傘借ス能女房

百二十八 舟に乗り

○足の辛度なる飛脚 ○笠の節季を笑ふ毛刺

○仕事してゐる戎島 ○軒語呼びにくる湊ばし

○大將をする傳母丁兒

百二十九 ふり捨られ

○お福仲居と酔ふ法師 ○夢會悦で去ぬ質屋

○布袋の哀な夜抜跡 ○溝にしよんぱり捨る猿

○藝の揃ふた菊石廊

百三十 ふくまして

○お針世話する寺八百屋 ○隠居座へ出す白齒藝子

○居候に論語讀す伯父 ○初心へ傑を呼ばす連

○棧敷へ供を殘す後家 ○妾お福にした齒醫者

○帆下風邪引菱垣水子

百三十一 二夕道に

○子と出たおそき待女房 ○薄刃の厚い寺八百屋

○蛤取りが持ッた鹽 ○口入が通ふ後家銀主

百三十二 ふり廻し

○爺格氣する鉢坊主 ○首の否身なおどり婆

○短氣短氣にしたお杉 ○蜻蛉でとんぼ釣るとんぼ

○拂ひの端手な新問屋 ○中風へ見せる樹々の雪

○茶席おかしい新口入 ○兀た牽頭がチヤル草履見

○瓢へ迷ふ節繪所

百三十三 ふりかけて

○鞆へ羽織の活る鬮 ○稽古駕町へ寄り傳母

○三毛へ鯉を減した妾 ○汐干の悦な濱芝居

百三十四 こしとすり

○莖洗ひ去ぬ出入り婆 ○借り繪符武士を笑ふ按摩

○花日和泣く鬘髮結 ○ひが豆腐屋がつなぐ錢

○理想嫁の去髪頭慮 ○長門屋行が借ッた店

百三十五 こりもせず

○一枚着ると逢ひ戻り ○今度の聳む能男
○一ツ家へ薬盛る葦醫 ○素人銀主がみる座組

百三十六 こしかけて

○頬斗り洗ふ義太夫凝り ○針仕業する勝満前
○流行開帳が泣く霖雨 ○一針助ける乳貫ひ
○嫁仲人する勸化婆

百三十七 是はしたり

○丁兒の天定ぬぢる助 ○十夜の尻を撫る婆
○鼻無しに逢ふ國の友 ○万歳へ狎抱退く妾
○すり身つまんだ糊貫い

百三十八 爰で遣ろ

○紋日風呂屋がさした爛 ○衝立直す木綿買
○留主は承知の軒語初

百三十九 剛がらし

○何にも云ぬ大番頭 ○子持が入る寒念佛
○灸上戸な手習屋の師 ○覗く子辻がす疔瘡爺

百四十 是切りじや

○御神燈でこるふり魚や ○日かゝ状の來た質や客
○寄麗に拂た高附 ○大名へしらす施行風呂

百四十一 是が否じや

○貫ひ機敷へ來た見舞 ○虱見贅る油しめ
○火を仕る妻がばやく釣 ○旅での雪隠こまる關

百四十二 爰等でも

○お山屋笑ふ桃見妾 ○冷しへツヤミを見せるざる
○新歌を聞く参宮藝子

百四十三 照らされて

○色の白なる奉納猿 ○鼻の邪んた飴天狗
○八郎兵衛になる舞臺客

百四十四 手を廣げ

○足の捧に成ル日銭貸 ○泣く子おどしに來た紺屋
○年の云やうの愛な舞子

百四十五 傳授もの

○出來ぬ手妻をチャル牽頭 ○腰の譽人へチャツた八瀬
○廻し喰ひ將子ヤル質屋

百四十六 出たり入ったり

○近所にも待ッ花かへり ○付直に惚た御殿貫
○隙狀數ある木戸の囁 ○長ふ暮した孫の留主

百四十七 未町祭りに燈した灯

○魁が汗かくふ坐芝居 ○床の小さい物掛合

百四十七 天狗になり

○役者の家號いふ妻 ○望性の減つたはんじ物
○外母の居つた粽巻 ○裏中の噂の髪結ふ妻

百四十八 手のひらで

○田葉粉の繼めする百姓 ○寡がうくな煤はうひ
○子の脊中かく薪割祖父 ○禿に羽根を取らす鬮
○馬の尿ふむ越後獅子 ○年の隠せぬ大字かく子

百四十九 てんがうして

○關が闢して砦果の座 ○蟻先立たた生薬屋
○砂糖屋へちんば引く丁兒 ○下女に這はれた黒焼屋
○鰻の茶漬捨てる妾 ○痰ぬきへ屑を出す妾
○坊主落寺屋に減る机 ○蟻に外療呼ぶ薪割

百五十 有るものを

○凝りぬ淨るりおしむ友 ○妻が水さす家具講入り
○呼屋へ頼む癩病氣 ○忌札へ賣な先の齒者

百五十一 間を見て

○おもやへ遣る調買ふ別家 ○隣りの弟子のゆく稽古
○入札落す藏普請 ○松に座替へる月の客
○櫛の極まる於母家持

百五十二 有るかい

○糸へ尋ねる出合會 ○近眼が明けた龍虎圓
○助言へたばこ繼ぐ毛剃 ○質屋の一封笑ふ日手間
○御番頭客へ問はず青

百五十三 哀なもの

○喰殘魚の見舞受る鬮 ○梳髪へチャル節季仲居
○ざこ寐の中の玉率頭 ○相合傘で去るあびや
○壳籠見せる釣戻り

百五十四 哀なり

○後家の手本に成つた後家 ○親仁率頭が捨ぬ端手
○關が喰てるる一夜鹽 ○耳の潰れた芋売賣
○米の飯喰ふ小百姓 ○御新造と寐る若旦那
○續く雨笑ふ小家歩遊

百五十五 味付ケて

○變改易へ轉す母 ○晝寐を起す鮓屋唄
○三十九と斥す後家の年

百五十六 青々ど

○鼈と意名の附く達士 ○繁昌の見へる八百屋店
○ごもくの積る五日の後 ○さうへの遊ぶ東福寺
○朝露持つた庭の景

○茶せんへ鹿の子はづむ妾
○濱へ禮する濱角力
○屏風の曠な賀祝ひ後
○南瓜こまる地藏祭
○初日のさまる勸進元
○子に名を付る馬捨場
○人買ひを待油締
○瞬の氣譽る遊び宿
○一、腰端手な堀出し買

○母とよろこぶ姑の氣
○彼岸の賃をはづむ母
○父の粹笑更もどり
○土産だゝ助賦る馬士
○妾が痘潰す小刀屋
○跡先見て

○子安地藏を拜む藝子
○數醫の香だ壹文糸
○出る智恵借さぬ姉縫子
○道亂細工す
○二重目狭む寺花見
○番頭が這入る 鹿路次

○まだ振る拳に牽頭の藝
○手筒おどしの吹く手筒
○太鼓持つて来た太鼓有町
○恪氣の蚊遣り逃る夫
○友藝子親がみる釣臺
○戻る徳利へ消す自在
○逃夕立を見る關の部家
○追はれ病犬立膝行
○節季へ指を打った野等

○忍びが知らす棧敷の美
○供が直切らす入齒ちん
○盃まはす弟嫁
○坊主同士見る桂川
○持越しが笑齋の朝
○在客の有願會當家
○しびりの切れた登舟
○返事封じて切あやめ
○花立去め石仲士

○掛取りのゆく講釋場
○本間の美女もとれる庄官
○太夫へ見せるうたひ本
○剥れた友がみせる鉢
○美男が提た螢籠

○棚元助のやむ久三
○とどや土産の出せぬ夫
○兄どり逃がす二日灸
○碁の強成った辨慶醫者

○辨慶へも鹽茶汲す妻
○看板うらむ軒傳ひ
○八百やの意見する女房
○看板

○難へ還る直の張る仕丁
○直の早出来た道中馬
○由良殿起す七段目
○眼の揉てある湯鯛鉢
○流す湯おこし妾の下女
○螢本間に取った姉

百六十四 三 人

百六十五 さすり

百六十三 幸ひじや

百六十一 さゝやいて

百六十 サアたまらぬ

百五十九 跡先見て

○水屋見直なほり下女しもめ ○お針はりがはる染直ぞめし
○妾めかけがくり戻す糸車いとぐるま

百六十八 寒む成なッて

○花車はなぐるまの不興ふけうな若旦那わか旦那 ○目利めきも舌したを巻く焼刃やきば
○汗あせかいてる足袋たびや手間てま ○参會まきあひ下向したむかひ笑わらふ下戸した

百六十九 きくどすぐ

○はしがる唄うたの寄よる長家ながや ○明あけた店みせ又また閉とす毛剃けし
○旅用たびもち意いする見みせ物師ものし ○稻荷いなりへ参まる移うつり氣妾めかけ

百七十 貴様も歎なげイ

○供ともの添そへの手笑てわらふ易者やすしや ○通とほぬ所ところわらふ牽頭連けんとうづ
○金谷かなやで逢あふた友息子ともむすこ ○兄あにのも買かふて遣やる薺なづな
○相見あひまる客きやくがこまる藝子げいこ

百七十一 氣きにこたへ

○江戸えどの冷聞ひびきく野等のらの母はは ○太鼓たいこ見みに出でる蟹婆かにばあ
○土坪どひら沙汰さた聞きく預あづかり伯父おやぢ ○勝負しょうぶ付つけ待まち橋仲居はしなな

百七十二 疵きずがつき

○姉あねに果はの有ある諸もろの師し ○家質いへぢ歩あ拂はらふ息子むすこの世よ
○八尾やびへ嫁よめ入いりさす雛ひなや ○一い輪りん殖しょくす薄書うすかきかき

百七十三 疵きず見みせて

○本玉ほんたま自慢まする干屋せちや ○さんげ咄はなしの入い六部むく
○生い梨子なしせがむ八百やちひの子こ ○濕しつの自慢まをする毛剃けし

百七十四 氣きを退のイて

○隣となりの龜物かめもの好このんだ妾めかけ ○西瓜すいかの眼利めきする茶器屋ちやくきや
○父ちちの日暮ひぐす元辨慶もとべんけい ○櫻見おうみ活いける女醫者おんないしや

百七十五 聞きや何所どこも

○子こに張はる祭まつりり泣なく子數こかず ○豊年ほうねんで足たりぬ人置屋ひと置きや
○夜ぬけよぬけの人ひとにひつ不審ふしん

百七十六 きくにつけ

○嫁よめへ氣きがるひ夕時ゆふじ凝こり ○女房にようぼうのはぢる下駄げたの罪つみ
○物迷ものまよひ止とま儒者にんしやの伯母おば ○まだ皮膚ひふ落おちぬ酒さけや薬くすり
○内證ないしやうの弟子でしも有ある手習てならひや ○親仁おんなの年としのおしひ北きた
○若世わかよの欲ほむ出でる施藥せやく ○高たかい芝居しばをみる達士たつし
○親おやの恩おんしる役盛やくさかり ○親おやの恩おんしる役盛やくさかり

百七十七 きく出して

○巢すへ角つのを振ふる山やまの神かみ ○摺すレ薬くすりの勵ほみ笑わらひ仕打しうち
○本卦ほんけを端手はなでに祝いはふ藝醫げいい ○剃そりしたぬり子笑こわらふ樵屋しやうや
○釣つりへ毎日まいにち買かふ日手間ひてま ○内うちの用出もち來きぬ北仲士きたなかし
○野等のら藝げいつと止とめる職しやく ○籠甲かごかうの來き止とむ新質屋しんしちや
○子飼こがひへ衣裳いしやう張はる置屋置きや

百七十八 きん

○旦那と峠越す丁見 ○延紙で包んで来た家賃
○組重の早い婆呼屋 ○年の灘越す染み仲居

百七十九 油断ハならぬ

○愛する美男退くお外母 ○雀の巢見るのりや婆
○十月の汐を操る夫 ○冬枯野越す木綿買

百八十 行かぬが勝す

○關取りへ留主遣ふ按摩 ○毛剃の日切り笑ふ茶屋
○大病へ病氣遣ふ藪醫 ○拳跡へよる馬士の汁

百八十一 ゆるりつと

○御眼借り泣かす儒の雪隠 ○お辨をひらく初日暮
○晝網泣かす能太夫 ○たのもし會て酔ふ質屋
○二親のある骨こづき ○雪隠で螢見る庄官

百八十二 指さきで

○姉に眼貰ふ雛の盃 ○障子の破損泣く舞屋
○足の上った出入り按摩 ○子に藝仕込め末社禰宜
○自在明とする傘屋 ○身上を棒に振る米や
○お針が知った他所の雪

百八十三 夕部から

○顔見ぬ猫に婆の易 ○芝居へ騒動笑ふ旦那

○何所ぞへ銀の下ぬ癩

百八十四 眼遣ひで

○姉が仕にせた楊弓屋 ○聾惚れさす傑お山
○たしなむ藝の出手習や ○會説に絶句さした藝子
○家主ぐにやノ／＼さした後家

百八十五 女夫して

○草鞋はかす太鼓打 ○意見の下手な新置屋
○仕立得意も取る脊負 ○涼み按摩が出す茶店

百八十六 見事

○鮑で顔の見えぬ鬮 ○別た貳百の鳴る毛剃
○書だし數へ泣く牽頭 ○閉た息吹く眼利武士

百八十七 見うしない

○妾が辛氣がる若白髪 ○初午所コじやないお外母
○譽人へどちる露はふひ ○長門の妙を知る丸子
○わかす場あせるいろは下女

百八十八 尻こそばふ

○遠路の跡へ戻る養子 ○十月に産む蠟屋囃
○無理の盃うける聾 ○草臥れぬ足揉す夫
○女人堂越へる女ナ形 ○奴コが通る麥の畦
○茶漬喰っている紋日藝子 ○剪れ鞠詫が貰た梨子

○なま生なませい金魚きんぎょみる子こ傳母つれはは

百九十九 しづまつて

○さうへかうどなり講隣かうどなりが知る手事てきぎ ○長家ながやに洗あらふ増まし莖菜きんぎょ
○按摩あんまと這入はいる明あく檀尻たんじり ○大嫁おほよめ入いる見る辻喧嘩つじけんか

百九十 師走しふすいのやうに

○塚筋つかぢん客きやくわらふ花車はなぐるま ○彈人ひびいてがこまる露つゆはらひ
○團扇うちあひをつかふ田樂屋でんがくや ○去いんだ棚經たなをりを笑わらふ妾めかけ
○揚あげの日に仕舞しふ内うちの用もち

百九十一 しめて仕舞し

○婚禮こんらいの急せぬ養子やし御ご ○今朝けさは寐過ねすぎす貧乏びんぼう鳥とりや
○負まへ壹坪いつへい誘さそう毛割けがれ ○梯子はしごの囀さえずへ粹すいな酒屋さかや
○初十日はつじつ景氣けいきゆる生洲いけす

百九十三 辛しん度どやノ

○功者こうしやな淨じやうるり聞きいた妾めかけ ○伯父公おふこうを粹すいにした継ついでり人ひと
○旦那だんな笑顔えがほさす下向げかうの妾めかけ ○鮮染屋せんぜんやを去いした妾めかけ
○能師のうし送おくつて來きて仲居なかつ ○豆鶴まめづる折かつた矢瀬やせの嫁よめ
○ツイ隣となりかり來きた藝子げこ ○仲居なかつが讀よんだ庄官じやうくわんの狀じやう
○坊ぼく歩行あるかした中野道なかのちの

百九十三 尻しりふつて

○子こにぬめたうす燒栗屋やきくりや ○印籠いんろうの僧そうハ女醫おんないしや者しや

○伴僧ばんそうとすれてある小僧こそう ○夏裏なつうら掃除そうじする奴やつこ

百九十四 辛しん抱いだせ

○京きやうの町連まちづれる杓順禮しやくじゆんらい ○大瓶おほびん巾きん見みせて有ある二日ふたひ
○濱雪はまゆき隠借かくかる猿廻さるまわはし ○弟子でしへ我われいふ取り出關でせき

百九十五 しほらし

○門松かどまつを撰いるかし座敷ざしき ○上菓じやうが子のある關せきの袖そで
○はてつばらめに廻まわる馬うま ○上菓じやうが子の有ある關せきの袖そで

百九十六 正しょう月げつで

○買人かひてへくとい舟玉屋ふねたまや ○聲こゑ詔めいてるる木綿きわたん買かひ
○長ながひ入いつ梅泣うめなく土仲士つちなかし ○莖菜きんぎょを延のす儒者じゆしやの妻つま
○外科げいけの禮泣らいなく自前こゝろ隠女かくめ ○楊枝やうじのたまる鱈たら老らう死し

百九十七 忍しのらおどし

○御座ござへ飛とのる手に鼓つづみ ○妾宅めかけ裏うらへ來きた鹿島かしま
○馬具ばぐやの端手はたてな初節句はつせつぐ ○弟子でしも櫻さくらの逗留とどまり醫者いしや
○樹守きまもり無事むじな黒燒屋くろやきや

百九十八 忍しのらい

○笹さ婆はで嘴くちばし白手拭しろてぬぐい ○二日ふたひの屏風びやうぶ覗のぞく伯父おふ
○葬禮そうらいの馬士ばしぞめく友とも ○小丁こてつち見みる小兵衛こへいゑ見る毛割けがれ
○關せきの子こ懸かる祭まつりり客きやく

百九十九 エラちよほくり

○冷し又呼ぶ子賣り屋 ○もさ客に減る牽頭の腹
○けふる馳走に逢ふ碁打

二百 得手に入り

○角力の盡なり闘と闘 ○丁兒の扱かす流木綿
○挽茶の傳授聞く丁稚

二百一 畫をかいて

○居續の腰をぬく牽頭 ○聲のしづかな直り外母
○田舎へ仕込みする日傘 ○油障子の隈だつ床
○居候の居能提灯屋

二百二 エラ呵られ

○城譽てるる鉄つんば ○手水鉢奇麗にした這出
○手叩きもどる男妾 ○下向の妾へ来た染屋

二百三 忍らかろが

○酒の通のどをる毛剃 ○急た世帯を見舞た伯父
○子へいろは歌うたふ馬士 ○張った行燈の廻はる馬士
○長門屋戻り見廻ふた友 ○似ぬ物真似をした旦那
○あをつ灯に寐ぬ水主の囃

二百四 エラ落

○手代と縫ふた表方 ○嫁の奥齒も見た按摩
○角力場鴉を去ぬ留主居 ○遅参藝子の番の針

○白湯めつたりと香む鯉万 ○夢覺め旦那聞く弁辨

二百五 ひつこかし

○樂家で糸とめめる會 ○こよりに鬨をした舞子
○不動へ盤を持ッ佛師 ○隠居へ詫る柳かけ

二百六 ひつそりど

○外母の去跡わらふ妾 ○仕にせの分かるねり薬や
○弁當の屑てくふ茶漬 ○彼岸の入った醫者手習や
○姉の嫁入った淨るり屋 ○様子附人が呼ぶ藝子

二百七 引ても

○素で呑 鮑泣く牽頭 ○月のうりめしい婆物嫁
○上町こまる井戸替日雇 ○仇草こまる別業守り

二百八 ひかへめに

○隠居の年をさす仲居 ○銚り針打つ上大工
○脈のある掛去る花車 ○棟梁が受ける取りの盃
○法事隣がくふ茶漬 ○端手新店へ賣問屋
○出店の弟へ遣る紀念

二百九 ひやーど

○牽頭が問ふ直いふ背負 ○顔ををしへる枕敷
○嗅見る毛剃見る剃人 ○みどりの咄し聞々娘

三百十 モウしめた

○弟十に似た土仲士
○二階から聞
○會釋の酒屋笑毛刺
○隣町の四ッ聞く丁見
○けふかり散葉笑土佛

○東風俗がいぢる出合糸
○年棚釣りへ贅な
○鴛の氣仕込み直す宿老

○燧に注文のある上座
○髡籠で戻る丹前客
○踏跡へ貳朱追ふ藪醫
○ちりけへ力抱人の手
○母へ詫する御被ニワカ

○干物や去ぬ非番武士
○留主事をす大番頭
○荷馬いたはる親仁馬士

○家主が泣いた夜ぬけ跡
○留帳の消へぬ新呼屋
○疝癪藝子笑ふ監甲屋
○組重の荒れた初荷馬士
○西瓜の皮で照れる關
○馬士が汚した受取帳

○子の砂持ちへチャル仲士
○關の嫁の美聞く取り出
○師匠役者が聞く目安
○明けた米チャル軒語戻り

○ちよんがれ丁兒笑ふ輪替
○損物たんと有茶器屋
○入りぬ鯛買ふ妾隣り
○一見客へ賣る日が少

○揃への出来た貧乏町
○夫かり誘う髪の出來
○振ったお客に引く藝子
○宿老もそれる汁もどり
○跡ではおどい後家の髪

○還る注連へ膳下す母
○みどりの笠へ消す自在
○戸棚の詫にゆくととなり
○左りへ持った灸ばし
○鹽ふみの狀に伯父の詫
○妻へ眼はじく留め手習子
○火燧へ囁を呼ぶ居職

○土用干かチャル質の札
○茶碗ひし居へる法師の母
○鯉すゝめる丸めん店
○繼子の脊筋吹く毛刺
○棚元鼠譽る儒者

○粹過父へ買ふ庵地
○雛へ鏡を出した父
○観音そしる順禮婆
○醉丹坊儒者が持った筆
○錢箱買に忝る馬士

○せつかく來ながら

○世がまられて

○世話なしじや

○もふ能かろ

○物ハはづみ

○最くへる

○物の見事に

○餅買ふて

○もふおさめ

○最少とひくい

○二階から聞

○堀 残す 關 笑ふ 妾
○妾の 機嫌 取る 紫野
○質屋 連泣く 京 参り
○海老屋の 鎌を 借る 餅切
○日光の おしい 押へくれ

三百十一 精進

○おどり 世話 甲斐 笑ふ 美男
○藝子 立ッ 送る かしこ 客
○敷入り 仲居が 呑める 酒
○お午の日 する 妾の 下女

三百十二 關に仕て

○夜舟へ 母が 増す 蒲團
○外母 かり 數を 算 雜煮

三百十三 脊くらべさし

○立ッ 會 役場 稽古 屋
○子に 息杖を 切る 仲士
○机景 氣な は やり 易
○錢よみ 仕舞 野等 息子
○大工の 年暮つゝ 嫁
○榎屋が 掛る 太鼓の 師

三百十四 少しゆるめ

○履もの さがす 蕎麥の 客
○關が 仕かける お茶 人形
○店おろし 立つ 粹 隠居
○番頭も ゆく 二の 替り
○入梅へ 氣を 置く 鼓の 師
○聲入り 髪を 結ふ 番頭

三百十五 姿替

○建士へ 這入る 二度目の 禮
○一ッ 家中 泣かす おぼこ 後家
○辻を 廻つて 来た 乞食
○紀念も 扶持も 貰ふ 妾

三百十六 すげなふに

○終代 拂ふ 婆 妾
○蓬 呼び 次ぐ 弟の 外母
○菜種 の 看板 みる 鰻や
○呼屋が 拂ふ よい 節季

三百十七 助人が有り

○加減 損なふ 辻田 樂
○七夕の はづむ 廊寺や
○愛 失ふた 舞子の 狀
○日雇が 邪尸 がる 質や 仕事
○礎へ 油 断の なりぬ 母

三百十八 京へ往て

○三味 線箱も 持ッ 息子
○いろは 歌やが 呑むたばこ

虫目がね終

明治廿五年二月一日印刷
明治廿五年二月十一日出版

故人 芳井馬宥選

元板不詳

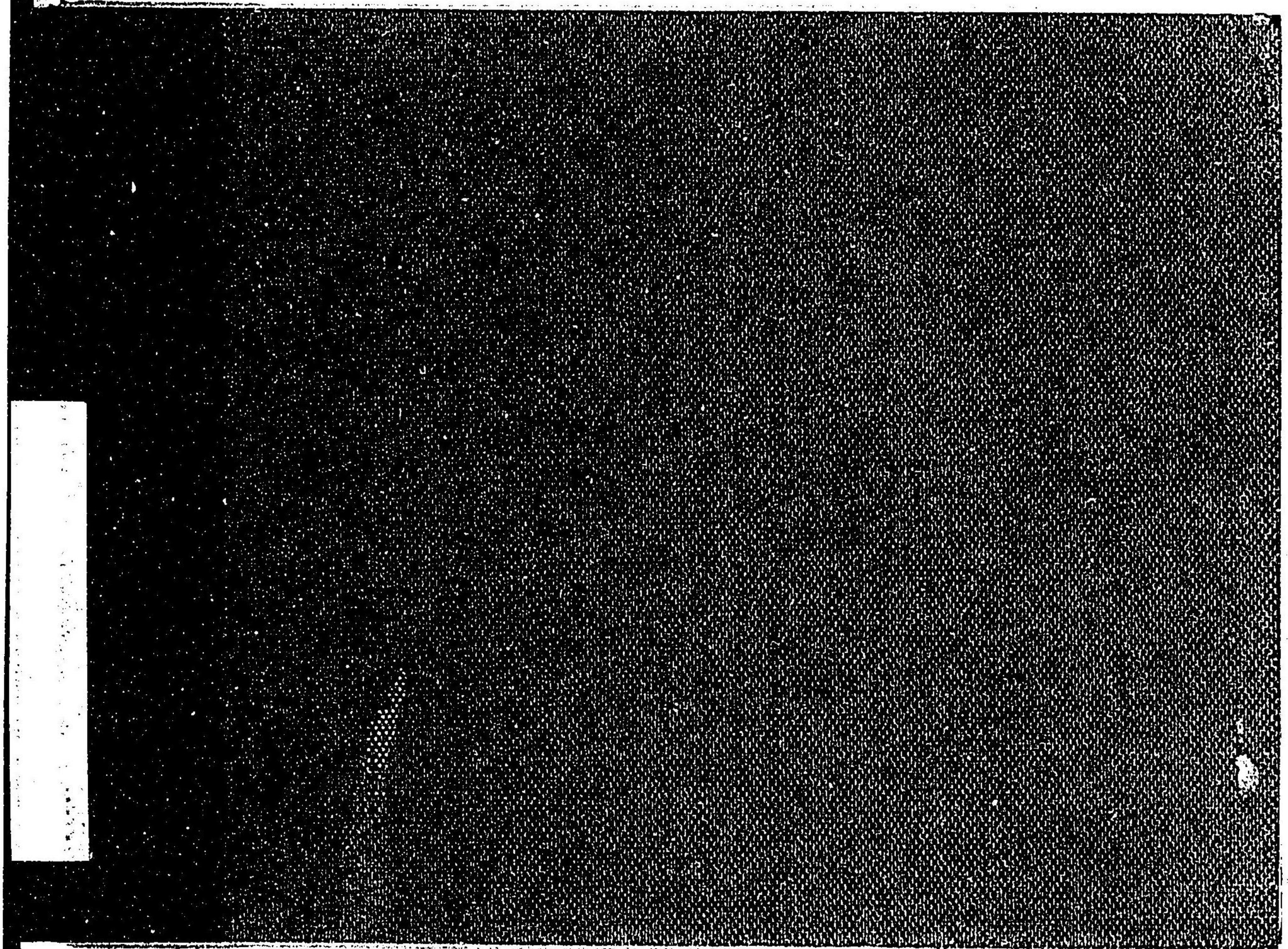
發行者 中村淺吉

京都市上京區宮小路通
三條北入福長町廿八番戶

印刷者 佐々木嘉之助

同市下京區花屋町西洞院東五入
西松屋町第八番戶(明進堂支店)

1974



特22

916

冠附虫目鏡

国立国会図書館

087713-000-5

特22-916

冠附虫目鏡

芳井 馬宥/編

M25

DBF-0026

